



こいずみ・やくも

1850-1904年。随筆家。リック・ラフカディオ・ハーン。19歳でアメリカ生まれ、19歳でアメリカ派員として来日。島根の英語教師として。泉セツと結婚。妻泉八雲と名乗る。『ついでに』で日本文化を研究し、ての髪を写真提供 小泉 凡さん

今年没後100年を迎えた明治の文豪として知られる小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）。数多く出版された作品の中で骨董「幽霊滝（龍王滝）」と怪談「をしどり（オシドリ）」は、小泉八雲（以下ハーン）と日野町が深く関係していると言えます。

ハーンの文学分野は、翻訳文学、ルポルタージュ紀行文学（探訪記事）、再話文学（物語文学）などで「幽霊滝」「をしどり」を始め晩年の作品は、再話文学（地方に伝わる民話に、文学としての魂を吹き込み語り直す）にあたります。ハーンは、怪談話など超自然的（神秘的）なものには、

常に真理があり、人が生きていくために欠かせない好奇心や想像力を与えてくれるーと信じていました。ハーンの世界には、必ずと言って良いほど人間界と超自然界とが出てきます。「をしどり」「幽霊滝」もそうです。これらの怪談話には「人間の世界は人間だけで完結しているのではなく、自然や超自然的なものと同じ輪の中にあり、共生している」ということを伝えたかったのではないのでしょうか。超自然界は、自然を恐れ敬う気持ちを教えてくれ、人間に生きる目的や勇気を与えてくれる。「自然と共生できない民族は滅びる」とも言っているので「共生」ということをとても大切にしていました。怪談などの多くは、妻の小泉セツから聞いた話を元に書いたと言われ、人による語り（口承文化）の良さを大切にしていました。民話などの語りは想像力の根源です。そのことは今の時代にも言えます。耳で聞くということは記憶力や想像力を養います。また、親子のコミュニケーションにもつながっていくと思います。ハーンは明治25年、隠岐旅行の後、倉敷を通り熊本に帰る途中で黒坂村（現・黒坂）に立ち寄ったという説があります。



こいずみ・ほん
小泉八雲のひ孫。島根県立島根女子短期大学助教授。小泉八雲記念館顧問。著書「民俗学者・小泉八雲」(1995) 恒文社など

龍王滝

高さ70mから流れ落ちる龍王滝（滝山神社境内隣「日野町中宮」）
2歳の幼児を連れて参ると首がなくなると小泉八雲が小説「骨董」の中で幽霊滝として紹介